

シンポジウムS4 骨をどう読むか－古病理における病変の解釈－

How to read the bones - interpretation of lesion in paleopathology-

オーガナイザー：藤田 尚

10月10日（9：00～11：00）C会場

古病理学は、過去の人類および動物遺存体を対象とし、肉眼観察を主な手段として、骨に残る異常から、当時の社会の宿主要因、環境要因、病原要因といった疫学要因を探ることが大きな使命の一つとなっている。肉眼での判別が概ね可能である代表的な疾患の例としては齲蝕、歯槽膿漏、骨膜骨髓炎、梅毒、結核、ハンセン病等の特殊性炎・非特殊性炎があり、腫瘍性疾患や、骨折に代表される外傷性の疾患、加齢変化による関節疾患なども対象となる。さらには、エナメル質限形成、クリブラ・オルビタリア、ハリス線などのストレスマーカーも古疫学的ストレス指標としてしばしば用いられる。また、骨格に残された各種の痕跡から、当時の階級差や性差による古代社会の復元も古疫学的研究として古病理学の範疇に含まれよう。これらの疾病痕を分析して得られた知見は、その生命体が生存した時代の疫学的要因を明らかにし得る。しかしながら、これらの病的変化を正しく見極め、集団の疫学指標とするためには、骨に残る疾病痕の的確な判断と、疾患に対する病態生理学の高度な解釈と理解が研究者に求められる。このように古病理学における病変の解釈は、決して容易ではないことから、誤った解釈に陥ることもしばしばである。本シンポジウムでは、主に感染症とストレスマーカーを中心に研究の現状を報告し、病変の適切な解釈におけるいくつかの課題を検討する。

講演

S4-1 重篤な溶蝕性多発性関節炎を呈した近世人骨（萩原 康雄）

Severe erosive polyarthritis in a human skeleton dated to the early modern period of Japan (Hagihara, Yasuo)

S4-2 日本における古人骨の齲蝕研究－判定基準と観察者間誤差について－（藤澤 珠織）

Research on dental caries in ancient human skeletons in Japan - evaluation criteria and interobserver variation (Fujisawa, Shiori)

S4-3 社会の複雑化に伴う身体活動の集団間差および性差の時代変化（米元 史織）

Temporal changes of inter- and intra-variations in MSMs with increasing in social inequality (Yonemoto, Shiori)

S4-4 古人骨におけるストレスマーカー評価の問題点（藤田 尚）

The problems of evaluation on stressmarkers in human skeletal remains (Fujita, Hisashi)

S4-5 特異的感染症における古病理学的特長（鈴木 隆雄）

Paleopathological Features in Non-specific Infections (Suzuki, Takao)